

二〇二〇年度

上宮学園中学校入学考査問題（二次A一般学力型）

国語

（注意）

- （１）この問題用紙は、「開始」の放送があるまで開いてはいけません。
- （２）問題は「一」から「三」まであります。試験時間は五十分です。
- （３）解答用紙は別に一枚あります。
- （４）解答用紙には、必ず受験番号・名前を記入しなさい。
- （５）「終了」の放送で、筆記用具を置きなさい。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

もうすぐ運動会。運動会は競技ごとに、配点が決まっています、五年生が競う二人三脚リレーは、クラス対抗リレーについて得点が高い。二学期がはじまってすぐの学級活動で、タニン^あの古賀先生^{こが}は、熱く語りかけた。

「いいか、みんな。わが五年二組は、二人三脚にかけようと思う。この競技には、クラス全員が参加する。いわば、チームワークがとわれる競技だ。全校生徒に五年二組のチームワークをみせてやろう。全員の力を合わせて、勝利を勝ちとろう！」

古賀先生は、二十五歳^{さい}。体育が大好きでいつもジャージ姿の男の先生だ。

「うちのクラスは、男子が十六人、女子が十二人。偶数^{ぐうすう}だから、ちょうどいいな。」

さっそくペア決めることになった。ぼくは、すぐにななめうしろをむいた。光太^{こうた}の席だ。目が合って、A 笑いあった。これで決定^①。ばんざいをしたいような気分がこみあげて、顔が少し熱くなった。

その日から、放課後は二人三脚の練習にあてられた。クラスのみんなは用事があるときをのぞいて、五十メートルを一日一度は走って帰ることにになったのだ。

「ワンツ、ワンツ。」

かけ声をかけながら、ひもではばった足を交互^{こうご}に出す。ぼくも光太も足は速い方ではないけれど、ちょっと練習をしたただけですぐにスピードがついた。リズムが合ったのだ。

なにしろ、ぼくらはいちばんの友達同士だ。

ぼくらは放課後だけではなく、昼休みにも、欠かさず練習をした。そのかいあって、三日もすると、どこのペアにも負けないほどになった。

「ぼくら、強いよな。」

「これならきつとスタートの組でいちばんとれるね。」

身長順に並ぶと、クラスでいちばん前のぼくと、三番目の光太は第一走者ということになっていた。

「ぜってー、勝とうぜ。」

「うん。」

ぼくたちは、グータッチをしてちかいあった。

なのに、その次の日のことだ。光太から、

「転校することになった。」

と、きかされたのは。

学校へ行く途中だった。

「えっ？」

② 頭の中が白くなった。意味がわかった瞬間、目の奥からなみだがせりあがってきて、道路がゆれた。それをぼくは必死でこらえた。光太が歯をくいしばっていたからだ。③ ひとりで泣いたら恥ずかしい。ぼくの顔は真っ赤だったと思う。

あの日のことを思い出すと、鼻の奥がつんとした。まぎらわすために、ぼくはスコップを花だんの手前の地面に突きたてた。ガツガツガツ。

「ワンツ、ワンツ。」

グラウンドからきこえるかけ声が、大きくなっている。

かたい土をけずりながら、Bグラウンドを見ると、谷川くんの姿が見えた。ペアの内藤くんとスタートのジュンピいをしている。ぼ

くはすっと視線を落とした。

④ 「光太のかわりを、真吾にたのもうと思うんだけど。」

古賀先生がそう言ったのは、光太が転校したつぎの日だった。先生のとなりには、谷川真吾くんが立っていた。先生と身長があまり変わらない。

「スタートの順番がいちばんはなれているから、それがいいと思うんだ。」

先生は大きな声で続けた。たしかに、谷川くんならばくと走ったあとに、余裕よゆうを持って自分の番にそなえられる。だって、谷川くんは、クラスでいちばん背が高いから。しかも足の速さもクラスでいちばんだ。

「バランスが。」

言いたい言葉が、出なかった。谷川くんの顔をそっと見てみた。きつと⑤ぼくと同じことを考えていたのだろう。眉毛まゆげがさがっていた。

「心配するな。二人三脚はチームワークだ。練習すればなんとかなる。」

「そうだよ、真吾。そっちがピリでもこっちが本番。おれらでばんかいすれば、クラスは勝つし。」

先生のそばから、ひょっこり内藤くんが顔を出して、そんなことを言った。内藤くんは谷川くんと組む、クラスのアンカーだ。ぼくの

X

(中略)

「いいものを持ってきたんだ。」

ポケットの中から、白い布を取り出した。はちまきの親玉aみたいな長細い布だ。

「たすきだ。」

古賀先生は、にやりと笑ってたすきを谷川くんの体にしぼりはじめた。

「なんですか、これ。」

とつぜん胸のあたりをしぼられて、谷川くんはあたふたbしている。

「おまえたちが二人三脚をするのにちょうどいいと思ってな。優斗ゆうとが真吾のTシャツをにぎると、のびるばかりだろ。それでたすきの登場だ。胸にしっかり巻いたたすきをにぎれば、優斗の体も安定する。」

古賀先生は自信満々に言った。

さっそく、グラウンドに出て練習することにした。ぼくは、谷川くんの背中^{ひたひた}のたすきをしっかりとぎる。今度は心細くない。古賀先生の言っ
たとおり、しっかり手ごたえがあった。そのうえ谷川くんが、

C

ぼくの左肩をつかんだので、さらに上半身は安定した。

「がんばれー。」

ゴールラインでクラスのみんながマっていた。

「ここまでだぞ。」

内藤くんが、手をふりまわしているのが見えた。ぼくは、ぎゅっとたすきをにぎった。

「せーの。」

「ワンツー、ワンツー。」

谷川くんのかけ声に、ぼくも大声を出した。

外、内、外、内……。

心の中で言いながら、ぼくらは走り始める。谷川くんの大きな足に

D

前にやったときには、すぐに転びそうになったのに、ちゃんと前に進んでいる。ぼくはたすきをしっかりとぎって足をはこぶ。

「おー、いいじゃないか。」

となりを走っていた古賀先生が、声をあげた。

外、内、外、内……。

足をえカクニンしながら、ぼくは交互に足を出す。

「先生の思ったとおりだったな。」

満足そうに古賀先生が言ったとき、谷川くんの足がちょっと早く出た。

「おっと。」

おもいがけない力で左足が引っぱられて、バランスをくずしそうになった。そんなぼくの肩を、谷川くんがしっかりつかんだ。ぼくもたすきをにぎる手に力をこめて、なんとかもちなおした。

「ワンツ、ワンツー。」

谷川くんが大きな声でリズムを示し、ぼくもそれに合わせて声をかける。

「ワンツー、ワンツ。」

ぼくは懸命に足をあげた。だんだん調子が合ってきた。ふたつの足が、リズムよく地面をけりはじめる。

「ワンツ、ワンツ。」

ふたりの足は自然と速くなった。歩幅はちゃんと合っている。

「もうすぐゴールだ。」

谷川くんが言って、ぼくは前を見た。本当だ。ゴールがどんどん近づいてくる。ゴールラインを見つめたまま、ぼくは一直線に走った。

「ゴール！」

内藤くんの声がひびいて、ばちばちと、拍手がきこえた。

⑦ ぼくは谷川くんが突き出したこぶしに、自分のこぶしを突きあてた。

運動会まで、あと三日。

(まはら 三桃『なみだの穴』による)

問1 — 線部あゝえのカタカナを、それぞれ漢字に直して答えなさい。

問2 —

A

D

 に入る言葉を、次の中から一つずつ選んで、それぞれ記号で答えなさい。

ア ずっしりと イ がっしりと ウ ちらっと

エ ぴったりと オ こくりと カ にこっと

問3 — 線部①「ばんざいをしたいような気分がこみあげて」とありますが、その理由としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 自分は一体だれとペアを組むことになるのだろうかという不安が解消され、ほっとしたから。

イ 二人ともあまり足が速くないので、遅くても自分だけのせいにはならないだろうと考えたから。

ウ 言葉を交^かわさなくても光太が自分と同じ気持ちだったことがわかって、うれしかったから。

エ 光太とペアが組めたので、五年二組のチームの勝利はまちがいだろうと思えたから。

問4 — 線部②「頭の中が白くなった」とありますが、このときの「ぼく」の様子としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 約束を破ることになると落ちこんでいる光太を見て、はげましたいと感じている。

イ 泣きそうな顔をしている光太がかわいそうで、自分もなんだか泣きそうになっている。

ウ 光太が何を言っているのかがすぐには理解できず、ぼんやりしてしまっている。

エ 最高に相性^{あいしょう}のいい光太がいなくなったらだれとペアを組めば良いのかと困っている。

問5 — 線部③「ひとりで泣いたら恥ずかしい」とありますが、「ぼく」と光太はどのような関係だったのですか。「〜という関係。」に続くように、文中から九字でぬき出して答えなさい。（句読点なども一字に数えます。）

問6 — 線部④「光太のかわりを、真吾にたのもうと思うんだけど」とありますが、古賀先生がそのようにしようと考えた理由を説明した

次の文の 1・2に入る言葉を答えなさい。ただし、1は九字、2は十一字で文中からぬき出して、そ

れぞれ答えなさい。(句読点なども一字に数えます。)

クラスで一番背が高い真吾なら、身長順に並ぶと 1 の「ぼく」と一緒に走った後でも自分のスタートまで余裕があるので、
ゆっくりと 2 のではないかと考えたから。

問7 — 線部⑤「ぼくと同じことを考えていた」とありますが、「同じこと」とはどのようなことだと考えられますか。「背」「バランス」という言葉を必ず使って、**四十字以内**で答えなさい。(句読点なども一字に数えます。)

問8 Xに入る言葉を、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 胸がずんと重たくなった イ 頭がすっきりと軽くなった

ウ 足がずきずきと痛んだ エ 気がさっぱりと晴れた

問9 — 線部 a「親玉みたいな」・b「あたふたしている」の文中での意味としてふさわしいものを、次の中から一つずつ選んで、それぞれ記号で答えなさい。

a 「親玉みたいな」

- ア 形はちがうが、より大きいような

イ 形が似ていて、より小さいような
- ウ 形はちがうが、大きさは同じような

エ 形が似ていて、より大きいような

b 「あたふたしている」

- ア いやがって逃げようとしている

イ びっくりしてあわてている
- ウ 意味が分からなくて困っている

エ おどろいてこわがっている

問10 — 線部⑥「ない」と同じ働きものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア やさしさがあるかないかが問題だ。 イ 一回戦で負けるなんてなさけない。

ウ 今年の冬は意外と寒く感じない。 エ これでもう逆転される心配はない。

問 11 — 線部⑦ 「ぼくは谷川くんが突き出したこぶしに、自分のこぶしを突きあてた」とありますが、この時の「ぼく」の気持ちとしてふ

さわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 自分とペアを組みたくなさそうだった谷川くんの方からこぶしを突き出してきたことが意外で、とまどいながらもこぶしを突きあててうれしく思う気持ち。

イ 谷川くんのおかげでなんとか転ばずにゴールまでたどりつけたことに感謝し、光太の代わりの相手として谷川くんのことをみとめてあげてもよいだろうと思う気持ち。

ウ 当初の心配などまったく無用でとても良い感じで走れたことに満足し、これだったら初めから光太ではなく谷川くんとペアを組んでおけば良かったと後悔する気持ち。

エ 谷川くんとペアを組むことに最初は気が進まなかったけれど、おたがいに歩幅を合わせて協力し、気持ちを通い合わせて走ることができて良かったと思う気持ち。

二 次 of 文章を読んで、後の問いに答えなさい。

これから何かをしようというとき、その決意表明としていちばんよく使われる言葉は、何でしょう。試験勉強や、部活動での試合や大会の前だとか。そう、大体が、「頑張る。」「頑張ります。」ですよね。応援するときにも、「頑張れ。」「頑張れ。」の連発です。

A、この「頑張る。」という言葉について、昭和三年（一九二八）に日本人としてオリンピックで初めて金メダルをとった織田幹雄さんは、「考えてみると日本には、緊張をさそう悪いことばがある。それは『がんばれ』である。」なんて言っています。頑張っているのが、励まし of 言葉になるときと、緊張感を高めてかえってプレッシャーにしかないときとある。ア

これも村上龍さんが書いていたんですが、頑張れと言われて、それでエネルギーが湧いてくるのは、そう言われた人にとって、今やっていることを続けることが、最大唯一 of 目標としてはっきり定まっているときなんだそうです。

B

、マラソンの選手でトップを走り続けている人にとって、沿道から「頑張れ、頑張れ。」と声をかけられるのは、本当に励みになったりする。だって、このトップという状況じょうきょうをゴールまで続けることが、その選手にとって最大唯一の目標なんですから。

でも、実際には、今の状態を続けるどころか、これからどうなるのか、どうすべきか、はっきりと定まっているわけではない、不安の状態にあることのほうが多いんじゃないでしょうか。【イ】

学校での生活にしても、将来の進路をどうするか、どういう仕事につきたいか、どういう学校に進学するかとか、はっきりと目標が見えているときなんて、そうそうない。むしろ迷いながら受験勉強したり、あシュウシヨク活動をするというのがほとんどでしょう。①そういうときに、親や周囲の人から「頑張れ。」「とにかく頑張れ。」って言われると、「一体、何に頑張れっていうんだよ。」とか、「頑張ればそれでいいのよ。」と、励ましに感じるどころか、正直、ムっとしたりする。

C

、その人の置かれた状況によって、②「頑張れ。」という言葉が応援になるときと、ならないときがあるってことです。やみくもに、とにかく頑張れっていうのは、せっかくの応援もマイナスになる。特に、うつ病とかノイローゼとか、心の病にかかっている人に向かって、頑張れって気楽に言わないほうがいいと言われます。頑張って、頑張りがすぎて、心の病になっているのに、D頑張れなんて言う

D

と、ますますその人を追い込んでしまうそうです。

人に気楽に頑張れと言うのは、気をつけたほうがいいんですけど、同時に、自分のことも「頑張ります。」なんてあんまり軽々しく言わないほうがいいんです。不安でしょうがないんだけど、どうすればいいかわからなくて、とにかく「頑張る。」なんて言っていると、自分自身にプレッシャーをかけて追い込んでしまったりする。よっぽど好調で本場にベストの状態であるときで、目標もはっきりしているとき以外は、頑張るという言葉は、あんまり気楽には使わないほうがいい。

もし、とにかく頑張りますと言いきうになったら、自分は今、〇〇に向かって努力していますとか、〇〇を目標にしていますと、具体的に目指していることを表現したほうが、将来に対していレイセイにファイトできる。バスケ部でレギュラーになろうと思えば、まずはこの位置からのシュートの成功率を高めることが自分には必要で、そのために毎朝三十分シュート練習することを決めて「頑張る。」とか。そっちのは

うが、とにかくレギュラーになるために頑張ると言うより、絶対に良い効果が出ます。[ウ]

私は、できる限り言わないようにしている言葉が三つあります。一つは、この「頑張る。」「頑張れ。」です。学生に何か励ましたいと思うときにも、この言葉を使わずに、それぞれの状況に応じて、いちばん適切な言葉を使って応援するように努力はしています。

二つめは、「忙しい。」です。忙しさを言い訳にしていると、本当に心の余裕がなくなってくるんです。大学なんかでも本当に良い研究^③をしている人ほど、教育とか大学のギョウムのために時間を割いて真剣に取り組んでいる。その割に、ご本人は涼しい顔をしていて、「忙しい。」なんてあまり言わなかったりするものです。「忙しい。」なんて言いすぎると、本当に自分のなかで余裕がなくなっていく気がします。[エ]

三つめは「普通。」という言葉です。普通は……とか、……が普通だ、なんて軽々しく言っていると、自分を狭い力^{せま}にはめ込んでしまったり、人を勝手なイメージに決めつけたりしてしまう。世の中、仕事でも、生き方でも、

Y

この三つをできるだけ言わないように努力するようになってから、私は肩がこらなくなりました。それはそれで大きな効果だったと思っています。肩こりのひどい人なら、やってみてください。

自分自身を変に追い込んだりしないため、不安の時代に生きるなかでは、言葉の問題というのは大切だと思います。「どうせ。」とか「無理だ。」とか、「つまらない。」とか、「面倒くさい。」とか、自分がしょっちゅう言っている否定的な言葉を三つ、できるだけ口にしないようにすると、気分も明るくなります。ぜひやってみてください。

将来の目標ややりたいことがなかなか持てないときには、まずは、「頑張る。」という言葉をやみくもに言うことを、やめてみることから始めてはどうでしょう。言いそうになったら、自分が何に向かってファイトしているかを、もっと具体的に表現しようとしてみることです。

(玄田 有史『14歳からの仕事道』による)

問1 A D に入る言葉を、次の中から一つずつ選んで、それぞれ記号で答えなさい。

ア つまりは イ ただ ウ おしろ

エ だから オ さらに カ たとえば

問2 次の一文は、文中の「ア」～「エ」のどこに入りますか。一つ選んで、記号で答えなさい。

その違^{ちが}いはどこにあるんでしょう？

問3 — 線部あゝえのカタカナを、それぞれ漢字に直して答えなさい。

問4 — 線部①「そういうとき」とありますが、どのようなときですか。文中の語句を使って、**三十字以内**で答えなさい。（句読点なども一字に数えます。）

問5 — 線部②『頑張れ』という言葉が応援になるときとありますが、それはどのようなときですか。説明した次の文の 1 2 に入る言葉を答えなさい。ただし、1 は八字、2 は七字で文中からぬき出して、それぞれ答えなさい。（句読点なども一字に数えます。）

言われる人自身にとって、1 2 ことが自分にとって 1 2 なのだと自覚できているとき。

問6 — 線部③「研究」と同じ成り立ちになっている熟語を、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 思考 イ 論文 ウ 読書 エ 公立

問7

Y

に入る言葉としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 普通にしていることが、一番難しいんです

イ 普通を追い求めることが、究極の目標なんです

ウ 普通なんてものは、どこにもないんです

エ 普通だと思ふものは、普通ではないんです

問8

本文の内容を説明した文としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア オリンピックで金メダルをねらっているような選手にとっては、日本中から応援の言葉が届くことは競技を行う上での自信になる。

イ たとえ将来が見えずにもがき苦しんでいるような時でも、周囲から応援の意味で頑張れと言われると意外に力がわいてくるものだ。

ウ その時々状況にぴったり合った言葉を使い、できるだけ否定的な言葉を使わないようにすれば、良い気分で過ごすことができる。

エ 将来への目標をなかなか定められない時には「頑張る」という言葉で自分を励まし、落ちついて具体的な目標を考えてみるとよい。

二

次の1～10の（ ）に入る言葉をひらがなで入れて、下の意味に合うように慣用句やことわざを完成させなさい。

- 1 （ ）を巻く……あまりにもすぐれているのでおどろくこと。
- 2 耳に（ ）ができる……同じことを何度も聞かされてうんざりすること。
- 3 （ ）返し……人の言った言葉をそっくりそのまま言い返すこと。
- 4 合わせる（ ）がない……申しわけなくて会う気持ちになれないこと。
- 5 （ ）をかぶる……自分の本性ほんしょうをかくしておとなしそうに見せること。
- 6 （ ）のつぶて……便りを出しても何の返事や連絡れんらくもないこと。
- 7 （ ）で茶をわかず……おかしくてたまらないこと。
- 8 （ ）の音も出ない……まったく言い返せないこと。
- 9 まゆに（ ）をぬる……だまされないように用心すること。
- 10 （ ）が出る……予算をこえるお金がかかってしまうこと。